



# 万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部  
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口 3-8-3  
帝京大学医学部附属 溝口病院外科  
TEL: 044-844-3333(内線3223) FAX: 044-844-3222  
発行者：山川 達郎  
編集責任：万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部広報担当委員・  
村田宣夫 (帝京大学溝口病院外科)  
E-mail: nmurata@med.teikyo-u.ac.jp  
印刷：株式会社 dig TEL: 03-3551-3060  
年 2 回発行 1995年4月創刊

## ご挨拶

慶應義塾大学医学部  
医学部長・外科教授  
北島 政樹



第41回万国外科学会 (ISW2005) が南アフリカ連邦のDurbanで開催された。2450名の事前登録があり、年々本学会の発展が伺われ、本邦から米国に次いで二番目の参加数であった。LOC会長、Dr.Pillayも日本支部の貢献に非常な喜びを示してくれた。

今回は、南アフリカでの開催ということで外務省、旅行社の安全情報に対して開催前から日本の参加者はずいぶん神経質になっていた。

昨年、南アフリカ外科学会 (Cape Town) へSiewert会長と招待を受けた時にDurbanの施設やセキュリティーを視察したが、何ら心配ないという結論であった。後によく考えて見ると、南アフリカ観光局が滞在中は我々を完全にガードしてくれた為と分かった次第である。またDurbanの

市長がセルシオを公用車としている事が、一層安心感と対日感情の良さを印象付けたのかもしれない。

さて、8月24日にISS総会が開催された。事前にDr.Michael Sarr(USA)とDr.Jorge Corvantes(Mexico)が副会長選で争ったが、最終的には多数決でDr.Sarrに落ち着いた。

また、私がISS/SICとISW2007の会長として承認されたが、同時に比企能樹教授 (Durbanの副会長) に次いでMontreal総会の副会長として山川達郎教授が選任されたことは先生の永年の学会に対する貢献が評価された事であり、日本支部としても大変喜ばしい決定であった。

第42回総会は2007年8月26-30日カナダのMontrealが承認され、LOC会長のDr.Beauchampからコンベンション、アコモデーションなどが紹介され、大きな期待が寄せられた。

さて、オーストラリア (2009年) に次いで、AgendaにISW2011 decision for Yokohamaという一項目があり、反対もなくほぼ決定と考えても良いと思われた。

今回、日本支部会員が一度に55名増員された事は山川支部長の多大な努力もあり、理事会、総会でも高い評価が得られた。国際学会はご存知の通り、支部会員数、すなわち”数は力なり”の原則が残っており、今後は一人でも多くの方々にメンバーになっていただくことを節に希望する次第である。

## International Surgical Week (ISW) 横浜開催、2011年いよいよ実現

万国外科学会日本支部長  
帝京大学溝口病院外科・  
内視鏡手術センター 客員教授  
山川 達郎



1999年、Vienaにおいて開催されたInternational Surgical Week (ISW)において、初めてISW2007の日本招致表明してから、一貫して誘致運動を続けてきた甲斐あって、今回のDurbanでのISWのGeneral Assembly 2005において、ISW 2011が横浜で開催されることに決定した事が報告された。事前に内々にそのような情報が流れていたが、このGeneral Assemblyでの報告を受けるまで現実感がなかったため、嬉しさより本当にほっとしたとしたというのが実感である。

これも一重に、前会長 東京大学名誉教授 出月康夫先生、前理事北里大学名誉教授 比企能樹先生らのISS/SICでのこれまでのISS/SICでのご活躍にはじまり、慶應義塾大学教授 北島政樹教授が本年よりISS/SICのPresidentになられて、さらに日本の貢献度が高く評価された結果である。またWorld J. of Surgeryの編集委員として長きにわたって活躍された慶應義塾大学名誉教授 聖路加国際病院臨床医学教育顧問 阿部令彦先生、浜松医科大学名誉教授 故馬場正三先生をはじめ現在、編集委員としてご活躍中の東京大学教授 上西紀夫先生、名古屋大学教授 二村雄次先生のご活躍の結果であると思います。さらにはISS/SICの関連学会であるInternational Association of Endocrine SurgeryやIASMENの会長としてISW2005年までPresidentをお勤めになられた野口記念病院長 野口志郎先生や大阪大学名誉教授 岡田 正先生らの実績が評価されての決定であったと思います。諸先生方のこれまでのご活躍によることはいかに及ばず、ISS/SIC日本支部長としてここに深く感謝の意を表する次第であります。またこれまでご協力くださいましたISS/SIC日本支部会員各位ならびに、この度の会員増員キャンペーンにご協力下さいました皆様

に心から感謝申し上げます。今回のGeneral Assembly 2005においても約100名の新会員のうち、54名が日本人であったことが報告されています。心より感謝いたします。

開会式では、Honorary memberの推戴式が行われ、出月康夫 東京大学名誉教授に名誉会員の称号が授与されました。

またこのGeneral Assembly 2005に於いては、現President Professor J.R.SiewertがPast President of ISS/SICとして退任、北島政樹教授が新たなSociety President ISW (2005-2007)にご就任になられ、MontrealでのISW 2007のCongress Presidentを主催されることが報告されました。2005年8月24日開催されたBanquetにおいて北島政樹はISS/SICはnew Presidentとしての所信表明とISW2007 in Montreal開催に向けての決意を参加者にお話になりました(写真1)が、日本人としてここにいる幸せに酔うことができました。それに伴うCongress Vice Presidents ISW 2007が以下のように決定いたしました。

ISS/SIC Congress Vice Presidents ISW 2007  
Leigh Delbrige, Sydney, Australia,  
Andre Duranceau, Motreal, Canada,  
Tatsuo Yamakawa, Kawasaki, Japan  
Integrated Societies Congress Vice President  
IAES; Paulo Miccoli, Pisa, Italy  
IATSIC; Robald V. Maier Seattle, USA, ,  
BSI; Polly Cheung, Hong Kong, SAR  
IASMEN; Peter B. Soeters, Maastricht, NLが  
決定いたしました。

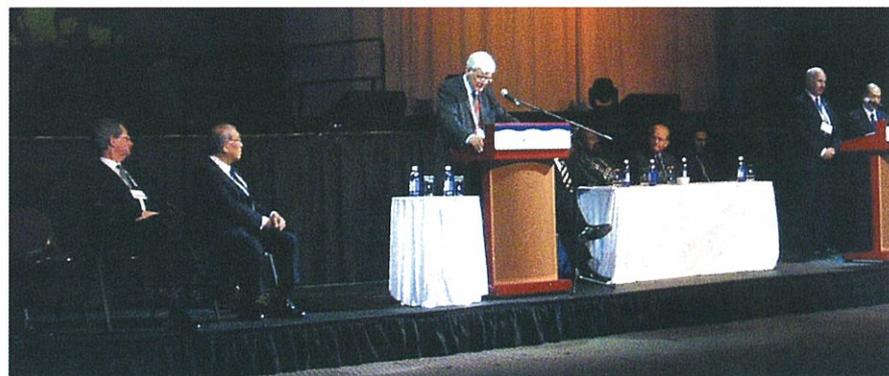
小生としては大変な重積でどれだけの貢献ができるか心配ですが、ご指名いただいた以上、お引き受けして北島会長を支え、Montreal ISW 2007を成功に導くために頑張りたいと考えています。

これからは北島政樹ISS/SIC会長を中心にMontrealにおいて開催されるISW2007の



(写真1)

成功に向けて日本支部会として何が出来るか、AdelaideにおけるISW2009に次いで横浜で行われるISW2011をどのように開催するか日本支部としてどのようにするか会員の皆様と一緒に考えていかなければなりません。今回の11月9日、日本支部総会を決起大会の日として活動を開始したいと考えます。よろしくお願ひ申し上げます。



特別寄稿

東京大学大学院消化管外科学・代謝栄養内分泌外科学 教授

上西 紀夫



万国外科学会の Official Journal は World Journal of Surgery ですが、大変光栄にも出月先生、比企先生、北島先生をはじめとして諸先輩のご推薦をいただき、2004年1月より editorial board に就任致しました。会員の皆様ご存知のことと思いますが、World Journal of Surgery は5つの学会の Official Journal で外科の様々な分野からの論文やレビューが掲載されており、まさに外科の総合雑誌と言えます。

Impact Factor は、2001年の1.644から徐々に上昇し2004年には1.952となり、今年は2.0を越えることは間違いのないことと思います。Editor-in-Chief は昨年後半に Prof. Ronald K. Tompkins から Prof. John G. Hunter に交代しました。日本からの editorial board としては私以外に、今村正之先生、北島政樹先生、二村雄二先生、高見博先生の合計5名が編集に参加しており、日本からの論文も数多く採用されています。

ところで、今年の7月号から表紙の図案が変わったのにお気づきのことと思います。世界の各大陸を拡大して順に見せて行くようですが、個人的には以前の世界全体が一度に見えているほうが雑誌の名前の World にマッチしているような気がします。いかがでしょうか。

編集作業の実際ですが、editorial board に就任した当座はプリントアウトした原稿が郵送されて来て、査読結果はファックスで送っていましたが徐々に電子化され、現在ではすべてオンラインで査読作業を行っています。平均すると毎月1~2篇の査読依頼が来ますが、その70

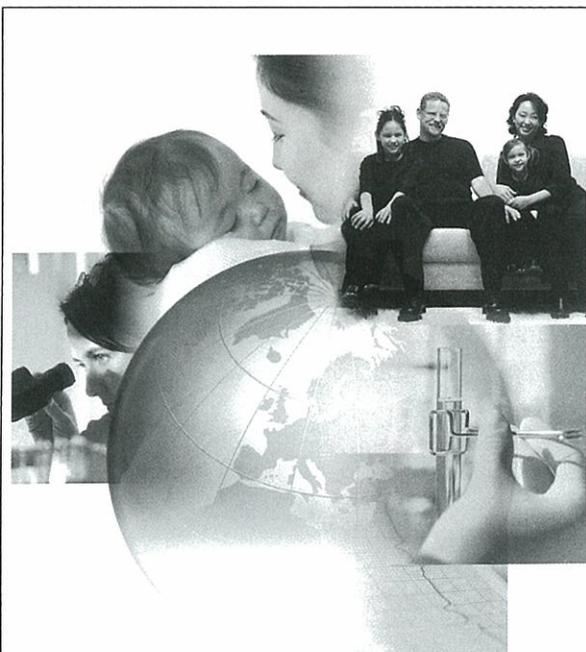
~80%は日本からの投稿論文です。

最近、impact factor が上昇したことや、英文投稿の習慣が身に付いてきたこともあるのでしょう、査読に廻ってくる数が多くなりました。しかしながら、国内の学会雑誌の編集委員をいくつか担当していること、さらに他の海外の雑誌の査読依頼もあり、忙しいときは査読が2~3ヶ月遅れることもあり著者には大変申し訳なく思っています。総じて言いますと、日本からの論文の質は高く、また、査読結果についても適切に添えていただいているので、最終的にはアクセプトと返事をする事が多いと思います。

論文投稿に当たっての注意事項などについては皆さんよくご承知のことと思いますが、私の経験を述べてみたいと思います。初めて海外の本格的な雑誌に投稿したのはもう20年近く前で、何と無謀にも Gastroenterology に十二指腸液胃内逆流による慢性胃潰瘍モデルの論文を投稿しました。2~3ヶ月して査読結果が知らされましたが、major points と minor points がいくつも書かれており、これはとても無理だと考えてそのまま放置しておりました。ところが、また2~3ヶ月したところで Editor-in-Chief から直接、あの論文はどうしたとの手紙があり、major points として指摘された問題について、これは検討していない、これはこう考える、と返答をしたところ幸運にもアクセプトされました。

査読結果として色々と問題点や不足している点を指摘して来ることは、逆に言えばそれに適切な返答をすればアクセプトするという事です。現在、日本消化器外科学会雑誌の編集作業を担当していますが、採用の価値がないと判断すれば細かな指摘は致しません。また、査読結果に対して、修正できることと出来ないこと、その理由を明確かつ真摯に添えればアクセプトになります。どの雑誌においても編集方針は基本的には同じであり、数多くの指摘があるということはアクセプトの可能性が高いことを意味します。また、わが国での常識と欧米での常識とは当然少しずつ異なります。

最近の若い先生方は英文論文を書く意欲と機会が増えてきていると思いますが、このような査読結果の意味を考えて頑張って投稿していただきたいと思ひます。そして勿論、修正点の少ない論文を査読するほうがお互い時間と労力のロスが少ないことは自明ですので、まことに勝手ながら editorial board の身になって質の高い論文を投稿していただければ大変助かります。また、そのことによって日本の外科学のレベルが高いことを世界に示すことができると思ひますし、そのために今後も精一杯頑張っていきたいと思ひます。会員の皆様方からの投稿をお待ちしています。



これまで、これからも、「患者思考」

患者さんのことを、自分のことのように考えると、見えてくるものがあります。いまだ満たされていない患者さんのニーズに応えるために何が出来るか。何を優先すべきか。私たちヤンセンファーマは、その最善の答えを導いていくため、これからも挑戦を続けていきます。

ヤンセンファーマは、CNS（中枢神経系）、真菌症、鎮痛・麻酔、がん領域のリーディングカンパニーを目指す、「ジョンソン・エンド・ジョンソン」グループの製薬会社です。

 ヤンセンファーマ株式会社

〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-5-2 <http://www.janssen.co.jp>

## ISW2005, Durban, South Africa の報告

山川達郎

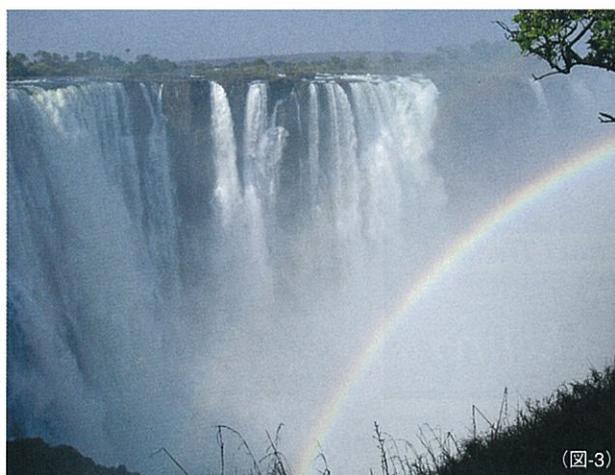
ISS/SIC Japan  
Chapter,  
National Delegate

今回のISWは8月21日から25日の5日間、South AfricaのDurbanの15,000人を収容可能な国際会議場；ダーバン エキシビジョンセンター（図-1）で盛大に開催されました。ダーバンは、ヨハネスブルグ、ケープタウンに次ぎ、南アフリカ第3の都市であり、インド洋に面した港町で温暖な亜熱帯気候に恵まれ、周辺には美しいビーチがあり、にぎわっていました。

特色は、19世紀に労働力として大量移住したために南アフリカで最もインド人が多い都市でもあり、インド料理店が充実、私と家内も出月教授と比企教授ご夫妻とインド料理を楽しみました。住民はきれいな英語を話し、ショッピングにも全く不自由を感じませんでした。

問題は少し物騒なところで、会場周辺でタイから参加した会員6人が歩いていたら暴漢に襲われ、怪我をするやらパスポートなど取られるなど被害にあったとか、タクシーに乗ってどこかに連れて行かれ身包みとられてしまったとか、何人かの会員がスリに会ったといったニュースがとびかいました。食べ物は美味しく、アメリカの西海岸Los angelsやSan Diegoを思わせる雰囲気があり、暮らしやすそうな町でした。

出席者は3500名、内2000名がSouth Africaを主体とするAfricaの諸国から参加でした。学術的には、ISS/SICで企画するために内容はすばらしいものであったと思いますが、開催国が南アフリカということで、2度といけないところという気持ちもあって参加された会員も多かったのではないかと思います。私も家内やNTT東日本関東病院副院長 小西敏郎先生、亀田総合病院 加納宣康先生、日本医科大学 渋谷哲男先生ご夫妻、帝京大学 下村一之先生、佐賀大学 中房祐司先生親子らと学会終了後、あるいは帰途、色々なところを訪ねる機会を得ました。その1、2を紹介いたします。



### ズールーランド（図-2）

南アフリカの最大部落、ズールー族が多く住むことからこの名が付いたものですが、かつて隆盛を誇ったズールー王国の遺跡や、ズールー族の伝統的な生活文化を体験しました。

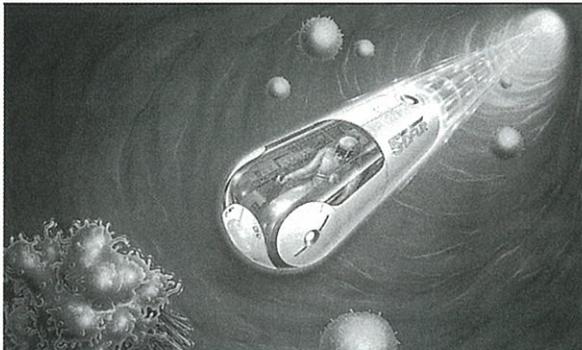
### ビクトリアフォールズ（図-3）

ジンバブエとザンビアの国境に位置する幅1.7 km、最大落差110mに及ぶ巨大な滝で、南米のイグアス、北米のナイアガラと並ぶ世界三大瀑布の1つで、滝の幅は、世界最長を誇り世界遺産にも登録されているものです。これには驚きましたし、遠くここまで来てよかったと思いました。

### 南アフリカを代表する野生動物の宝庫

サファリパークでは、ライオン、豹は残念ながら遭遇しませんでした。ゾウ、麒麟、サイ、バッファローの大群などに会いました。忘れられない思い出です。（図-4）

2007年のMontrealのISWも周囲には素晴らしいscenic pointがあることが、報告されました。今から楽しみにしています。皆様のご参加を期待しています。



**抗悪性腫瘍剤**  
 劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品<sup>※</sup>

**フルツオン<sup>®</sup> カプセル** 100 200

**Furtulon<sup>®</sup>** ドキシフルリジンカプセル  
注）注意—医師等の処方せんにより使用すること

【薬価基準収載】

※効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む使用上の注意等は製品添付文書をご参照ください。  
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元  **中外製薬株式会社**  
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1

（資料請求先）  
 ロシュグループ

2005年10月作成

特別寄稿

国際会議参加の意義  
—SICとの関わり—

独立行政法人国立病院機構  
仙台医療センター 名誉院長

山内 英生

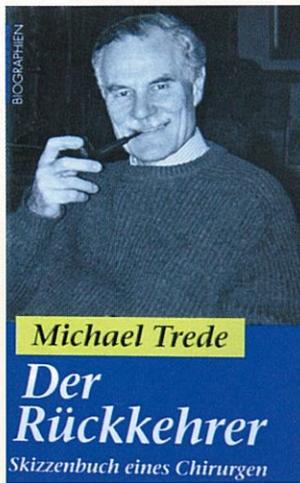


筆者は1979年8月から1981年9月までアレキサンダーフンボルト財団の研究者として、当時の西ドイツ、ハイデルベルク大学外科（主任 Fritz Linder 教授）へ留学する機会を持った。Linder 先生は私の恩師、榎 哲夫 先生と懇意で榎先生の紹介があって、留学が実現したものである。外科系では東大の三島先生がフンボルト研究員でケルンに、菅原先生がBauer教授の時のハイデルベルクへ留学されたことを後に知った。Linder教授は言わば、私の外国での恩師であるが、先生を抜きにしては私とSICとの関わりは語れない。フンボルト財団では研究テーマを決めてそれをハイデルベルク大学のサポートのもとで遂行することが義務付けられており、リサーチは主として実験外科部門や病理学、生化学部門と連携して行った。

臨床は主として当時ハイデルベルク大学、マンハイム病院のTrede教授の下で見学した。Trede教授はLinder先生のお弟子さんであるが、お二人共に、SICの会長をつとめられている。Linder先生は私が留学していた1981年に69歳で退官されたが、1994年に他界された。その時のドイツ外科学会雑誌の追悼文をTrede教授が書かれている（写真1、写真2は最近のTrede教授の回顧録）。



(写真1)



(写真2)

Linder教授はハイデルベルク大学のCzerny、Kirschner、Bauer教授の継承者であり、当時のドイツ外科学会の偉大な指導者であった。先生には常に私の事を気にかけていただき、リサーチにしてもそれぞれの部門の指導者に紹介していただき、肝不全や臓移植の事などそれなりの成果が得られた。先生は私に2つの学会には是非参加しなさいとして、ミュンヘンでのドイツ外科学会と万国外科学会

(SIC) を紹介された。両学会ともに正会員にして頂いた。

SICは当時Linder先生がドイツのnational delegate であったので、私はドイツのdelegateの推薦で正会員になったものである。SICはヨーロッパ中心の国際学会であるが、ここには出来れば発表して国際的な討論に参加しなさいとお話であった。ただ、発表だけでなく、バンケットを含めたいろいろな会合にでて、出来るだけ知り合いを増やし、なによりも、まず、ヨーロッパを見なさいとのことであった。そこで早速1981年のスイス、レマン湖畔のMontreuxで開催されたSICに発表し、それ以後、Hamburg, Paris, Sydney, Toronto, Stockholm, Hong Kong, Lisbonなどの学会に発表を続けてきた。昨年からはシニアメンバーにして頂いたが、4半世紀の国際学会での活動はまさにSIC中心であったといえる。SICは、参加したどの学会でのエピソードも印象深いものがある。

私は国際会議参加の意義は3つあると考えている。発表して自分の研究成果を国際的な批判に晒される機会をもつこと、学会発表の場での討論は短い時間であり、懇親会を含めた会合にも積極的に出てゆき国際交流を行うこと、および観光である。日本から長時間をかけて出てゆくの観光も見識を広めるうえでは重要である。このような意義を有する国際学会への参加により、Linder教授の言われるバランスの良い外科医が形成されてゆくものと考えている。先生は私によく、「Er ist sicher. Er ist noch unsicher. Ist er sicher?」という発言をされた。2003年に第5回医療マネジメント学会の会長をつとめたが、バランスの良い外科医でなければ患者本位の医療は出来ないと思っている。先生の「あいつは大丈夫か」という発言はそのような意味であったと思い出している。また、最近での情報社会ではあらゆる情報を簡単に得る事が可能なので、なにも国際学会に参加しなくても情報交換はできると考えている会員もいるかもしれない。これまでSICでの数多くの思い出の中で、ハンブルクの学会で私の臍頭切除のフィルムセッション（当時は16mm）に有名なR. M. Zollinger先生に司会をして頂いたときのプログラム（写真3）がある。

Longmire先生、井口先生、小野先生、四方先生、永川先生の名前も見え。このときの会議室には有名な教授が大勢集まっておられたと記憶している。Zollinger先生は私のフィルムを紹介するときに「He comes from Sendai, Professor Maki. Professor Maki is one of the greatest surgeons in the world.」と言われた。緊張もしたが、大変光栄なことであった。セッション終了後の交流が極めてスムーズに行ったことも良く記憶している。榎先生は97歳で現在もご健在であるが、当時の恩師、佐藤先生と榎先生にはこの時の雰囲気をお伝えした筈である。このようなエピソードをご紹介したのは、国際学会では世界中の外科医と短い時間で、インターネットや文献では得る事の出来ない国際交流が可能であることである。

若い外科医の諸兄には国際会議に出来るだけ機会を作ってご参加いただき、国際感覚を身に付け、バランスのとれた患者本位の医療者としてご活躍いただきたいと思っている。

| Film Session 4  |       | Tuesday, September 6, 1983   |  |
|---|-------|--|--|
| Room 13/14 (yellow)   |       | 14.00-15.30  |  |
| <b>Pancreas / Biliary tract</b><br>Chairmen: G. PARDO-GOMEZ, Habana, Cuba<br>R. M. ZOLLINGER, Cleveland, USA                                  |       |  |  |
| 14.00   | F4. 1 | Extended radical operation for carcinoma of the pancreas head region - transilateral retroperitoneal approach (TRA) for more radical operation (regional pancreatectomy).<br>T. NAGAKAWA, E. ASANO, K. KONISHI, M. KURACHI, I. MIYAZAKI, Kanazawa, Japan |  |
| 14.30   | F4. 2 | Duodenopancreatectomy for carcinoma of the pancreas - with emphasis on lymphnode dissection.<br>H. YAMAUCHI, T. SATO, Sendai, Japan  |  |
| 15.00   | F4. 3 | The role of transduodenal shincteroplasty in biliary surgery.<br>P. NEGRO, G. DE BERNARDINIS, D. TUSCANO, A. BIANCHINI, G. FLATI, D. FLATI, B. POROWSKA, M. CARBONI, Rome, Italy   |  |
| Film Session 5  |       | Tuesday, September 6, 1983   |  |
| Room 13/14 (yellow)   |       | 16.00-17.30  |  |
| <b>Portal Hypertension / Chronic Intestinal Obstruction</b><br>Chairmen: W. P. LONGMIRE, Los Angeles, USA<br>B. SPACEK, Praha, Czechoslovakia |       |  |  |
| 16.00   | F5. 1 | Modified Warren shunt to ensure shunt selectivity.<br>K. INOKUCHI, K. BEPPU, N. KOYANAGI, Fukuoka, Japan   |  |
| 16.30   | F5. 2 | Hepatic portojejunostomy.<br>K. ONO, Hiroaki, Japan  |  |
| 16.55   | F3. 3 | Treatment procedure for simple adhesive obstruction - with the aid of selective radiology.<br>J. SHIKATA, S. SATOH, K. FURUYA, F. KOHDAIRA, Y. TAKEDA, Kaga Itabashi-ku, Japan   |  |

(写真3)

注射用セフェム系抗生物質製剤  
指定医薬品 処方せん医薬品（注：第一薬師等の処方せんにより使用すること。）

**ファーストシン®**  
（注射用塩酸セフォソラン）

静注用0.5g・1g  
静注用1gキットS  
静注用1g/バッグS・1g/バッグG

■効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。 ■薬価基準：収載

FIRSTCIN® 武田薬品工業株式会社

# 第19回 万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部総会 議事録

2005.5.12(木) 7:15~ 名古屋国際会議場

秋丸琥甫 浅原利正 阿部令彦 石川正昭 大谷吉秀 川原田嘉文 北川雄光 北島政樹 北野正剛 小池 薫 桜井健司 信田重光 清水一雄 高橋俊雄 高見 博 田中雅夫 辻谷俊一 中尾昭公 梨本 篤 野口志郎 林 四郎 比企能樹 幕内雅敏 松本純夫 真船健一 横江隆夫 (事務局) 山川達郎 村田宣夫 宮島伸宜 出席者29名 (敬称略、五十音順)

- 1 山川達郎 支部長挨拶
- 2 北島政樹 慶應義塾大学医学部長 挨拶
- 3 山川達郎支部長より、日本から万国外科学会へ新たに130名新規入会したことが報告された。
- 4 万国外科学会日本支部の収支報告を事務局(村田宣夫)から行った。九州大学の田中雅夫教授が会計監査を実施し、会計が適切であり問題ないことが報告された。
- 5 本年度の予算案が提示され承認された。
- 6 北島政樹学部長より以下のようにミュンヘンでの理事会(3月)の報告がなされた。
  - ① 日本のactive member が52名増え、senior member が3名増えた。
  - ② World Journal of Surgery の電子化を進めている。
  - ③ 同誌のinternational associate editor に日本から1名(北野正剛教授)選ばれた。
  - ④ 今後の学術集会の日程で2009年はアデレード(豪州)、2011年は横浜が確認された。ダーバンで一般に公表される。

- ⑤ 本部のバーチ氏からダーバンでの学術集会に日本の企業から大きなサポートがあったことが報告された。
  - 7 慶應義塾大学の北川雄光先生からWorld Journal of Surgery の会議出席の報告があった。購読者を増やす方法が討議されていること、若年会員を増やす努力をすること、ビデオコンテンツなどが報告された。
  - 8 野口志郎先生から、昨年のスウェーデン、ウプサラでのIAESの報告があった。普段の集会よりも多数が参加したことなどが報告された。
  - 9 他の国際学会について、以下のように報告された。
    - ① 2008年9月2日から6日にパシフィコ横浜で世界内視鏡外科学会が開催されることが報告された。北野正剛教授が会長を務める。
    - ② 第6回国際胃癌学会が北島政樹会長の下、1200名の参加を得て盛会に行われたこと、次回は2年後サンパウロで行われることなどが報告された。
    - ③ 世界乳房健康協会とアジア乳癌学会の合同学術集会が2005年4月に東海大学田島知郎教授を会長として盛大に行われたことが報告された。
- (以上、文責 村田宣夫)

## 万国外科学会 日本支部会入会者

2005.4以降 登録順

|          |              |          |                  |
|----------|--------------|----------|------------------|
| 1 久米 真   | 秋田大学医学部      | 29 蔵並勝   | 北里大学医学部          |
| 2 山本雄造   | 秋田大学医学部      | 30 山口幸二  | 九州大学医学部          |
| 3 福澤正洋   | 大阪大学医学部      | 31 大塚隆生  | 佐賀大学医学部          |
| 4 山内清明   | 香川大学医学部      | 32 神谷尚彦  | 佐賀大学医学部          |
| 5 上之園芳一  | 鹿児島大学医学部     | 33 宮澤光男  | 埼玉医科大学           |
| 6 夏越祥次   | 鹿児島大学医学部     | 34 木村文夫  | 千葉大学医学部          |
| 7 江崎卓弘   | 九州大学医学部      | 35 佐々木巖  | 東北大学医学部          |
| 8 山名秀明   | 久留米大学医学部     | 36 金廣裕道  | 奈良県立医科大学医学部      |
| 9 鈴木則夫   | 群馬県立小児医療センター | 37 伊藤昌広  | 藤田保健衛生大学医学部      |
| 1 篠塚望    | 埼玉医科大学       | 38 堀口明彦  | 藤田保健衛生大学医学部      |
| 11 鎌野俊紀  | 順天堂大学医学部     | 39 岡正朗   | 山口大学医学部          |
| 12 手取屋岳夫 | 昭和大学医学部      | 40 松田正徳  | 山梨大学医学部          |
| 13 新宮聖士  | 信州大学医学部      | 41 小坂健夫  | 金沢医科大学医学部        |
| 14 真辺忠夫  | 名古屋市立大学      | 42 八十川要平 | 北里研究所メディカルセンター病院 |
| 15 落合武徳  | 千葉大学医学部      | 43 唐宇飛   | 久留米大学            |
| 16 杉本真樹  | 帝京大学市原病院     | 44 松澤克典  | 小白川誠至堂病院         |
| 17 野村幸世  | 東京大学医学部      | 45 亀山哲章  | 国際親善総合病院         |
| 18 有井滋樹  | 東京医科歯科大学医学部  | 46 中房祐司  | 佐賀大学医学部          |
| 19 田中真二  | 東京医科歯科大学医学部  | 47 中村清吾  | 聖路加国際病院          |
| 20 舟山裕二  | 東北大学医学部      | 48 田淵崇史  | 東京医科大学霞ヶ浦病院      |
| 21 池口正英  | 鳥取大学医学部      | 49 広瀬宣昭  | 千鳥橋病院            |
| 22 原口秀司  | 日本医科大学第2病院   | 50 渡辺昌彦  | 北里大学医学部          |
| 23 飯室勇二  | 兵庫医科大学医学部    | 51 矢永勝彦  | 東京慈恵会医科大学医学部     |
| 24 山中潤一  | 兵庫医科大学医学部    | 52 近藤匡   | 筑波大学医学部          |
| 25 佐藤美信  | 藤田保健衛生大学医学部  | 53 寺本研一  | 東京医科歯科大学医学部      |
| 26 杉岡篤   | 藤田保健衛生大学医学部  | 54 佛坂正幸  | 宮崎大学医学部          |
| 27 守瀬善一  | 藤田保健衛生大学医学部  |          |                  |
| 28 若林久男  | 香川医科大学       |          | 他、現在申請中12名       |

## お知らせ事項

ISS/ SIC General Assembly 2005から  
Wednesday, August 24, 2005/10/03  
At International Convention Center

**New election of re-election of Officers**  
President-elect 2005 - 2007; new; Michael Sarr, Rochester, USA  
Secretary General 2005 - 2009; old; Felix Harder, Switzerland  
Editor-in-Chief 2005 - 2009; old; John Hunter, USA  
General Treasurer new; Ken Boffard, Johannesburg, South Africa  
Councilors new; Jorge Cervantes, Mexico City, Mexico  
Gaurav Agarwal, Lucknow, India

**Information and Confirmation of Officers**  
Past President of ISS/SIC 2005 - 2007 ; J. R. Siewert, Germany,  
Councilors 2003 - 2007; A. Csendes, Chile  
President of ISS/SIC and Congress President ; M. Kitajima, Japan

**Election of Congress Vice Presidents ISW 2007**  
(one term)  
ISS/SIC Congress Vice Presidents  
Leigh Delbrigde, Sydney, Australia  
Andre Duranceau, Montreal, Canada  
Tatsuo Yamakawa, Kawasaki, Japan

**Integrated Societies Congress Vice Presidents**  
Paola Miccoli, Pisa, Italy; IAES  
Ronald V. Maier, Seattle, USA; IATSIC  
Polly Cheung, Hong Kong, SAR ; BSI  
Peter B. Soeters, Maastricht, NL; IASMEN

ISS/SIC Constitution の変更から  
Annual Dues の増額 ; 過去8年間、年会費はUS\$ 120としてきたが、来年度よりUS\$ 135に増額されることに決定

Membership; No Medical scientist involved in medical research related to surgery may also be accepted as members.

Active member ; National Councilor の審査後、National Delegate による承認を要すること。

National Delegate; one term; 4 years with eligibility for one term only

Chapter ; 150人以上のactive memberが必要

ISS/SIC日本支部長 山川達郎



### オキサセフェム系抗生物質製剤

指定医薬品、処方せん医薬品<sup>※1</sup>

# フルマリン

静注用0.5g・1g, キット静注用1g

日本薬局方 注射用フロモキシセフナトリウム Flumarin<sup>®</sup> 略号 FMOX

注1) 注意-医師等の処方せんにより使用すること

■薬価基準収載 ■「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌」、「原則禁忌」、「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。 <sup>®</sup>:登録商標

(資料請求先) 大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045  
塩野義製薬株式会社 医薬情報センター  
電話0120-956-734

製造販売元  
**シオノギ製薬**  
http://www.shionogi.co.jp/med

## 特別寄稿

ISW2005  
(南アフリカ、ダーバン)  
に参加して埼玉医科大学・消化器一般外科教授  
村上 三郎

この度、2005年8月下旬に南アフリカ(ダーバン)で開催されたISW 2005に出席致しましたので、その御報告をさせていただきます。

万国外科学会は昭和62年のオーストラリア(シドニー)で主催された時に初めて参加して以来、ほぼ毎回のように出席しておりました。しかし、2005年度のISWは南アフリカでの開催ということで、遠隔地であるとともに治安に対する不安からさすがに今回はパスしようかと考えておりましたが、「こんな時にしかアフリカに行く機会はもう一生ない」と思い直し、一大決心のもと参加することといたしました。ダーバンのホテルのロビーには学会会場までのシャトルバス案内の掲示があり、また、ホテルの従業員へは海外からの学会参加の宿泊客が大勢いることも周知徹底されていたようで、シャトルバスに乗って無事学会会場の国際会議場まで到着することができました。なぜわざわざこんなことを書くのかというと、実はホテルの従業員に、「学会会場まで歩いて行くことが可能かどうか」を聞いたのですが(地図で見ると10分ぐらい)、「危険なので、必ずシャトルバスに乗って行って下さい」との返事が返ってきました。まさに、外務省通達の「治安に十分注意して渡航する必要がある地区」を実感したからであります。会場に到着しますと、学会初日ということで大勢の各国の参加者が受付をしておりました(写真1)。恒例の万国外科学会の会場ですと3人に1人は日本からの参加者といった印象を持っておりましたので、やはりいつもの万国外科学会とは一味違った雰囲気を感じました。暫くして、会場内で帝京大学の高見博教授、野口病院の野口志郎院長など顔見知りの諸先輩に御会いすることができ、とりあえずは一安心いたしました。午前中はIAES(the International Association of Endocrine Surgeons)のセッションを聞きましたが、野口病院の内野先生による“甲状腺乳頭癌におけるAPC遺伝子の変異に関する研究”といった遺伝子学的研究発表や鏡視下甲状腺(あるいは副甲状腺)手術などの実践的外科手術のテーマなどが活発に議論されておりました。また、IATSIC(the international Association for the Surgery of Trauma and Surgical Intensive Care)のセッションでは、“Gunshot wounds”といった日本では考えられない、まさに国際学会らしいテーマがシンポジウムとして討論されておりました。かつて私がアメリカ(UCLA)に留学していた1990年に、当時からすでに甲状腺外科での世界的権威の一人でありましたUCSFのOrlo H. Clark教授のもとに手術見学に行く機会に恵まれ、大変親切に指導していただきました。臨床と研究が融合した実践的外科学に、まさに理想的な医療そのものを垣間みた感じで強い感銘を覚えました。それ以来Clark教授とは国際学会(特に、万国外科学会)で御会いする度に親しく話しかけていただき、その度に学問的な刺激を受けて気分を新たにすると同時に、初心(留学していた若かったあの頃)に戻ることができるいい機会になっております。今回もClark教授と会場で御会いする機会があり(写真2)、変わらぬClark教授の

activityに敬服いたしました。また、日本で大変お世話になっている隈病院の宮内昭院長とも会場で御会いすることができ、学問的motivationを高めることができました(写真3)。

これまで万国外科学会を含めて国際学会には何度となく参加してまいりましたが、まさにオリンピックではありませんが“国際学会は参加することに意義がある”と思っております。日頃の研究の成果を世界各国の先生にみていただき評価されれば最高ですが、若手の先生にとってはそのような大袈裟なことは考えずにむしろ気楽に参加されることこそ大切と思います。異国の地での各国の先生方の多種多様な治療方針、さらには診療や研究内容に接することによって、日常診療や研究面での意外なヒントが見つかるかもしれません。まさに、“これが正解である”などという一元的思考を放棄することこそ臨床医としての第一歩と思うのですが、皆さんはどうお考えでしょうか。“正解”を“不正解”として塗り替えられて進歩しているのが、まさに今までの医学の歴史ではなかったのではないのでしょうか。その意味で、今自分が行っている診療で果たして患者に十分満足のいく医療を享受していただいているのだろうか、また、後世の評価に耐える診療内容なのか常に自問自答する姿勢こそ臨床医に求められているのではないのでしょうか。その意味で、まさに、国際学会は自分の頭の中での“常識”を覆される(あるいは、覆す)いいきっかけになると思います。次回の2007年度ISWはカナダ(モントリオール)で開催されるとのことですので、日本からの多数の参加者を切に望んでおります。

前述したように、ダーバンでは治安の問題で個人観光の出来る状態ではありませんでしたので、現地へ行ってから旅行社にツアーの申し込みをしたのですが第一希望の国立公園へのサファリーツアーはすべてfull-bookingのため、空いていた“ドラケンスパーク山脈とジャイアントキャスル山”ツアーへ申し込みいたしました。そこで、偶然にも同じバスに同乗することになった独協医科大学外科の砂川正勝教授夫妻、群馬県立小児医療センター外科の鈴木則夫部長、埼玉医大川越医療センター外科の須藤謙一先生と片道2時間のハイキングを楽しみました(写真4)。ジャイアントキャスル山はアメリカのグランドキャニオンを彷彿させる壮大な風景でまさにアフリカ大陸ならではの印象でありました。ここは観光地としてはまだ未完成で、ランチタイムを過ぎると昼休みのため昼食を提供してくれるレストランがなかなか見つからず、やっと食事にあついたので午後5時でまさに夕暮れ時でありましたが、それもまた心地よいアフリカ大地での疲れといった感じでいい思い出となりました。その後、帰路の途中でジンバブエのビクトリア瀑布に寄り、ボツワナのチョベ国立公園でのジープに乗ったゲームサファリーで一日過ごし、まさにアフリカ文化を堪能することが出来ました。

日本から南アフリカ・ダーバンへは、香港かシンガポール経由、ヨハネスブルグ乗り換えで行かれた先生方がほとんどと思いますが、実は私の場合、マイレージの関係で旅費が安くなるドイツ・フランクフルト経由でダーバンに入りました。まさに、2日がかりの長距離旅行で体力が持つのか心配しておりましたが、何とか無事に帰ってくることが出来ました。それでは、次回2007年度カナダ(モントリオール)での万国外科学会で諸先生方にお会いできることを楽しみにしております。

## 写真説明

写真1: ISW2005(ダーバン)での受け付け会場風景

写真2: Orlo H. Clarkと記念撮影

写真3: 隈病院の宮内昭院長と記念撮影

写真4: アフリカの大地を背景にして

